

系統的関節疾患と遺伝子多型に関するシステムティックレビュー(東日本歯学会第23回学術大会 一般講演抄録)

著者名(日)	金澤 香, 柴田 考典
雑誌名	北海道医療大学歯学雑誌
巻	24
号	1
ページ	108-109
発行年	2005-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00009897/

幌市北区が6回(0.5%), 岩見沢市が63回(5.5%), 空知郡北村が8回(0.7%)であった。施設の訪問回数については、当別町が減少し、厚田村が顕著に増加した。当別町の減少は去年、今年と定期的な啓発活動を行わなかったことが挙げられる。厚田村の増加は新たに往診を開始した障害者施設が増えたためである。またそれに伴い、歯科医師2人の体制とした。

2. 地域住民への啓発活動

地域住民に対して、疫学調査を含む研究結果をもとに口腔・顎・顔面領域の機能を概説し、顎口腔系機能の全身の健康維持に果たす役割の重要性を啓発するための活動として、講演会への講師派遣は2回であった。

3. 歯の健康プラザの開設

当別町によって立案された「みんなでつくろう健康とうべつ」という健康推進計画の推進に対して、本学は、「当別町二万人歯の健康プロジェクト」を立ち上げ、歯科健診の実施や保健支援活動に加えて、種々の職能団体や高齢者サークルでの講演会などを実施し、町民の口腔の健康の維持・増進に関する種々の啓発活動を行っている。その一環として、JR当別駅前の店舗スペースを借り受け、「歯の健康プラザ」を開設した。

今後も、「地域支援医療科」としては、「治療」の観点からの訪問歯科診療と、「予防」の観点からの啓発活動に対して、さらなる積極的な取り組みが必要であると考えている。

患者の相談記録から見た患者ニーズとその対応

○吉野 夕香*, 越野 寿**

*北海道医療大学医療管理部センター事務課, **北海道医療大学歯学部附属病院地域支援医療科,

***北海道医療大学歯学部歯科補綴学第1講座

近年、患者中心の総合的な医療が求められており、その対象は疾患のみならず、患者個人やその権利に焦点が当てられている。我々は、附属病院において医療相談を受けた事例から、患者と医療者の良好な関係を維持する方策を探っている。今回は、2つの事例を中心に検討を行ったので報告する。

平成14年6月以降、直接患者から、または院内スタッフからの依頼で対応した相談36件(電話17, 直接面談19)の傾向について分析した。相談の内訳は、「専門的な医療技術の要求」8件、「苦情や不満の訴え」11件、「受診援助」、相談者の性別は、男性8件、女性28件、相談者分類は、一般19件、医療関係10件、施設4件、福祉事業所2件、行政1件で、相談者の居住地域は当別町9件、石狩市、岩見沢市各3件、江別市、月形町、浦臼町各2件で、本院受診者地域分布と近い傾向であった。他に、札幌市からも8件あった。相談を受けた時間帯は、午後3時頃に集中し、1件あたりの所要時間は、1件あたり15.7分であった。

事例1: 経済的理由から肺がんの検査を拒否

医師による相談担当への連絡が福祉ニーズの発見となり、行政の介入を含む地域全体での援助が実現し、受診に至った。

事例2: 施設入所で訪問歯科を利用している患者の家族からの受診

内容への不信

進行する病変による状況変化から、治療計画を見直す必要性が生じた。意思表示困難な患者にしばしば起こる事例で、より高度な洞察力が求められ、生活ケアスタッフとの連携が重要であることが明らかとなった。

医療機関は、受診に係る相談、調整にもリスクを抱える。しかし、そのリスクが放置された場合、患者に、①保健・医療・福祉サービスからの逸脱②その質の低下③福利の破綻といった影響を及ぼす恐れがある。したがって、患者の生の声に耳を傾けることに努め、「何をリスクと考えるか」という医療機関の姿勢や組織的な取り組みが必要となる。このことは、患者ばかりか医療機関の安全確保にも繋がるため、医療者のリスクコスト抑制も期待される。よって患者に適切に医療に参加してもらうためには、同一の疾病でも、患者一人ひとりの背景を理解したアプローチ方法での多角的な働きかけが求められる。

今回の分析結果から、生活背景等の問題解決が円滑な受診行動に繋がることが明らかになり、今まで以上に患者の立場に立ったコミュニケーションによって、患者に安心した受診の機会を提供できることが示唆された。

系統的関節疾患と遺伝子多型に関するシステマティックレビュー

○金澤 香, 柴田 考典

北海道医療大学歯学部口腔外科学教室

【目的】顎関節における変型性関節症(OA)は、関節円板前方転位に継発する二次性OAがほとんどであり、それに移行する機序については不明である。最近の顎関節症における疫学調査の結果、顎関節滑液分析の成果から「顎関節におけるOAの発生機序は、他関節のOAのそれと同様である可能性が高いと考えられる」。そこで本研究では、系統的関節疾患のうちOAの発生機序に関与している遺伝子多型についてメタアナリシスを行い、顎関節のOAの機序に関与する遺伝子多型を推定することを目的とした。

【方法】1995年から2004年までのMedlineデータベースを用い、Cytokines, Polymorphism, OAをキーワードとして抽出された14論

文を対象とした。それら抽出論文について、OA診断基準の明示、Interleukin-1(IL-1), Interleukin-1 receptor antagonist(IL-1RA), Tumor necrosis factor- α (TNF- α)についての遺伝子多型の検索、健常者対照群の設定、対象患者数が10名以上の4条件をもとに二次選択を行い、それらについて内的、外的妥当性の評価を行った後、解析を行った。

【結果および考察】二次選択より3論文が抽出され、これらについてEBMデータテーブルを用いて評価し解析を行ったところ、複合症例では、どの遺伝子多型についても有意差を認めなかった。各文献における遺伝子多型をアレル単位に換算したところ、IL-1 BC

3954TとOA発症の関係が $p=0.0007$ で有意を示した。また、OA発症には複数の遺伝子多型が関連している可能性が示唆された。

今後、顎関節OA患者および健常者における、OA関連遺伝子多型

IL-1 β C3954Tの発現率を比較検討するとともに、複数の遺伝子多型の検索を行う予定である。なお、DNAは頬粘膜SWAB法を用いて抽出する予定である。

北海道医療大学歯学部附属病院における悪性腫瘍入院患者の臨床統計的観察

○富岡 敬子*, 柴田 考典*, 有末 眞**, 武藤 壽孝*, 永易 裕樹**, 平 博彦**, 村田 勝**, 奥村 一彦*
*北海道医療大学歯学部口腔外科学第1講座, **北海道医療大学歯学部口腔外科学第2講座

【目的および方法】北海道医療大学歯学部附属病院病棟が、1980年6月2日に24床で使用開始されてから2004年12月末までの24年間に入院した悪性腫瘍患者87例を対象に性別、年齢、紹介の有無、年間当たりの症例数、合併疾患、原発部位、組織型、TNM分類、治療、予後について調査・報告した。

【結果】1. 性別は男性57例、女性30例。2. 年齢は28歳から89歳で平均は64.5才であった。3. 紹介の有無は、紹介「あり」78例(89.7%)に対し「なし」9例(10.3%)で、「紹介」78例の内訳は、歯科診療所42例、他歯科口腔外科13例、医科診療所6例、院内4例、不明13例であった。4. 年間当たりの症例数は1~6例で、最頻値は3例であった。5. 合併疾患は58例(66.7%)でみられ、循環器疾患24例、代謝性疾患18例(糖尿病12例、高脂血症6例)、肝疾患7例、呼吸器疾患6例、脳血管障害5例、消化器疾患と他臓器癌各3例であった。6. 原発部位は「舌」32例、「歯肉」32例、「口底」9例で、以下、「頬部」「口蓋」各4例、「耳下腺」「その他」各2例、「上顎洞」「口腔粘膜」各1例であった。7. 組織型は87例

中、扁平上皮癌70例、腺癌5例、悪性リンパ腫4例、悪性黒色腫2例、粘表皮癌2例、不明4例であった。8. 治療は74例に実施し、外科療法64例(うち化学療法併用が46例)、化学療法単独8例、放射線療法単独と放射線と化学療法の併用が各1例であった。9. TNM分類: 扁平上皮癌70例中、一次症例は64例で、そのうちTNM分類を判定した症例は46例(71.9%)であった。その内訳は「T2」23例、「T4」11例、「T3」7例、「T1」5例、いずれも「N0M0」が最も多く、それぞれ21例、6例、4例、5例であった。なお、TNM分類を判定しなかった18例中17例は、1992年以前の症例であった。10. 予後: 扁平上皮癌一次症例でTNM分類されている46例中、治療を行った43例では、2004年12月末時点で生存23例、死亡14例(原病死7例、他病死4例、不明3例)、不明6例で追跡率86%であった。なお、1994年から1999年までに外科治療を行った20例では、術後5年経過時点で生存13例、死亡7例(原病死3例、他病死4例)で、追跡率は100%に向上していた。

臨床実習における本学CT装置の活用状況

○佐野 友昭*, 細川洋一郎*, 大西 隆*, 田中 力延*, 飯沼 英人*, 南 誠二**, 篠崎 広治***, 金子 昌幸*
*北海道医療大学歯学部歯科放射線学講座, **みなみ歯科医院, ***しのぎき歯科医院

【目的】平成15年10月、本学にCT装置が導入されてから1年以上が経過した。CT導入の目的としては臨床的活用が主であるが、その他に研究的活用と教育的活用も忘れてはいけない。特に、教育的活用として歯学部学生に装置の構造、検査手順、そして、画像の読影を理解してもらうことは臨床教育上重要であると考えられる。今回我々は、平成16年歯学部臨床実習生に初めてCT撮影実習を導入したのでその活用状況について紹介することを目的とした。

【方法】対象は平成16年度臨床実習の歯学部5年生である。CT実習は木曜日の午前中に行った。撮像は断層厚2mm、管電圧140kVp、管電流130mA、撮像方式はガントリー0度のスパイラルを基本としたが、撮像上アーチファクトを避ける目的で任意の角度にガントリーを傾斜させるコンベンショナルな単純CTも行った。撮像実習に際して以下の点について配慮した。1) 被験者全員に承諾書

を作成した。2) 撮像範囲は必要細小範囲とした。3) 撮像した写真は個々の班内だけで使用した。4) 臨床上必要であるなら貸し出しを行った。

撮像終了後、必要であるなら再構成画像を作成し、写真をプリントアウトした。CT写真は他の画像写真と比較し読影に供した。

【結果】実習期間中に撮像された被験者は実習参加者90名(男性69名/女性21名)中、23名(男性21名/女性2名)であった。1班当たりの平均は2.7名、1班で最高4名、最低1名であった。部位別では上顎洞12件、上顎智歯2件、下顎智歯12件、顎関節1件であった。

【考察】臨床実習におけるCT実習は、装置の構造や検査手順の理解、そして他の画像検査(回転パノラマ、デンタル写真)と比較することで病態の本質を理解するうえで必要であると思われる。

授業を通じた医療事故防止対策の取り組み

○大山 静江*, 小田島千都子*, 沢辺千恵子*, 岡橋 智恵*, 長田 真美*, 五十嵐清治***
*北海道医療大学歯学部附属歯科衛生士専門学校, **北海道医療大学歯学部小児歯科学教室

【目的】平成15年12月に厚生労働省より「厚生労働大臣医療事故対策緊急アピール」が発出されて医療安全は医療政策の最重要課題の

ひとつに位置づけられた。そこで本校では、学生の事故防止に対する意識を高めることを目的として授業の中でヒヤリ・ハット(イン